THE STORY OF PEAPLE & AQUA

人と水の物語

宮廷人が狩場として愛した原野、交野ヶ原。

天野川が流れる交野・枚方付近は、古くは交野ヶ原と呼ばれ、多彩な動植物が生息する原野でした。桓武天皇をはじめ、数多くの宮廷人たちがこの地を訪れ、四季折々の自然を愛で、狩りに興じました。一方、この地には太古より百済からの渡来人が住み、百済寺を造営するなど、大陸の高度な文明やさまざまな文化をもたらしました。そして、ここを舞台に宮廷人と渡来人との交流が深まり、交野ヶ原の豊かな大自然を背景に中国古来の伝説が、やがて、今の日本に伝わる七夕伝説として広まったと考えられます。

天野川を銀河に見立てた先人のロマンティシズム。

平安の宮廷人が、いかに交野ヶ原を愛し、七夕伝説のイメージをこの地に見出そうとしたかは、地名や伝承地からもうかがえます。交野市の倉治には織姫をまつる「機物神社」があり、川をはさんで対岸にある中山観音寺跡には「牽牛石」が残されています。また、2つの場所の中間には「逢合橋」が架かり、年に一度、織姫と牽牛がここで出逢うといわれています。さらに、下流に目を転じると、雨の七夕には一羽のかささぎが翼を広げて橋となって二人を引き合わせるという話から名づけられた「鵲橋」があります。

いにしえの歌人にも詠われた伝説の地。

交野ヶ原を訪れた平安の人々は、この地の美しさを数々の歌に詠んでいます。そのなかでも、「伊勢物語」に収められている在原業平の歌とそれにまつわるエピソードはつとに有名です。ある日、天野川を狩りで訪れた惟喬親王がお供の在原業平に歌を詠むように命じました。業平は「狩りくらし棚機津女に宿からむ、天の河原に我は来にけり」（狩りをして日が暮れてしまったので、今夜は織女星の家に泊まろうよ。天の川辺に来てしまったのだから）と歌い、その返歌を思いつかない親王に代わって伯父の紀有常が「一とせにひとたび来ます君待てど、宿貸す人もあらじとぞ思う」（織女星は年にたった一度訪ねてくる彦星を待つ身であるから他の人には宿はかしてくれまい）と詠んで助け船を出したといわれます。

交野市スポーツ文化センター

川を見つめ、川を体験するよろこび。「七夕の川・天の川を清流にする会」

平成9年の枚方市政50周年記念行事「天の川シンポジウム」を機に発足した市民主体のボランティア団体「七夕の川・天の川を清流にする会」。今回は幹事長の園田洋子さんに活動内容などをうかがいました。

「七夕の川・天の川を清流にする会」に関するお問い合わせは、事務局／TEL.0720-46-2149

私たちの会は、市民の力で天野川を清流にしようという発想のもとに生まれた川の環境問題をとり上げていく団体です。具体的には、隔月の河川清掃や水質向上に向けた市への提言など、多彩な活動を展開しています。昨年からは新たな試みとして、7月7日の「川の日」に天野川をゴムボートで下る体験型イベントを始めました。また、ホタル博士ともいわれる会員の赤城正幸さんが中心となって、ホタルを呼び戻す活動を展開。この5月には天野川の支流でホタルが飛び交う姿を確認したといううれしいニュースも入りました。

これらの催しを通して、まずは、川を見つめ、川で遊び、川を身近に感じることから始めようという想いがみなさまに伝われば幸いです。

幹事長
園田洋子さん